

マロリー作『アーサー王の死』におけるアーサーの夢

森 ユキエ

序

アーサー王伝説はヨーロッパ文学における古典の地位を占めており、騎士道、宮廷風恋愛、聖杯探求などのテーマは、現代の文学ばかりでなく映画、オペラ、ミュージカル、ロック音楽やテレビゲームの世界にまでその影響を及ぼしている。中世において、特に13世紀から15世紀にかけて書かれた一連の『アーサー王の死』と呼ばれる作品は、韻文や散文という形式をとって、ヨーロッパ各国の聴衆や読者を楽しませてきた。1469年から1470年にかけてイングランドのサー・トマス・マロリー (Sir Thomas Malory) は、主に『アーサー王の死』と呼ばれる作品を典拠とし、それまでのアーサー王伝説を集大成して、アーサー王と円卓の騎士たちの栄華と没落を描いた膨大な散文作品を生み出した。¹本稿ではこのマロリーの作品に描写されている夢に焦点を当て、同じ題名を持つ他の三つの作品と比較して述べていきたい。

いずれの作品においても、権勢を誇ったアーサーの王国と円卓の騎士団の没落が、聴衆や読者の関心の的となってきた。この没落の原因については、作品ごとにこれまで多様な議論が展開されてきた。マロリーの作品においては、円卓騎士団内部において一族郎党に対する忠節と、女性への忠誠心の間における衝突が、結果的に王国崩壊をもたらしたとする説 (Höltgen 121-37)、またエリザベス一世の家庭教師だったロジャー・アスカム (Roger Ascham) の “open mans slaughter, and bold bawdrye” という言葉が象徴するように、暴力と欲望によって円卓の崩壊が生じたとする説 (Batt 133)、さらに作品中にしばしば使用される “unhappy” という語を典拠作品との比較分

析を通じて、偶然がもたらした悲劇だとするものなどが挙げられる（不破38-51）。²

様々な読みが可能であるが、私は上述の三説のほかにも王国崩壊の原因を指摘できると思われる。ここで『アーサー王の死』作品群のアーサーの夢に焦点を当てると、夢には彼の未来に関する予言が盛り込まれていることに気づく。夢に何回か登場する蛇、その蛇はモルドレッドを表わし、アーサーの没落に密接に関連している。

マロリーの場合、終末部分に至ってアーサーの運命が決する前の晩の夢において、彼の未来は「運命の車輪」からの転落という形で告げられる。王の転落後のありさまを、英仏で書かれた『アーサー王の死』のなかで比較検討してみると、そこには大きな相違が見られる。各作品において、アーサーと夢の中に登場する「運命の女神」との関係や、「運命の車輪」からの転落に関する批評はこれまでにあっても、アーサーの「運命の車輪」からの転落の描写を詳細に考察したものは私の知る限りないと言ってよい。³

本稿では、13世紀から15世紀にわたるこれらの作品に表れる夢に焦点を当て、特にアーサーの「運命の車輪」からの転落直後の描写の分析を通して、マロリーの作品において、夢がアーサーの王国と円卓騎士団の崩壊、さらに彼の死の原因を示唆していることを検証する。

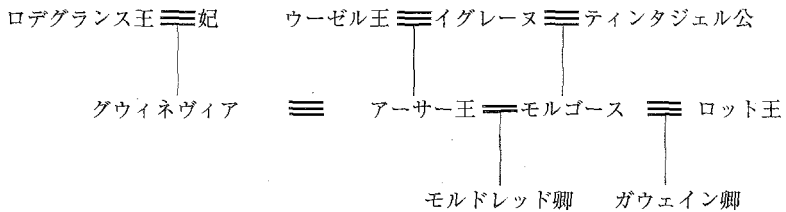
I 典拠作品と人物相関図

これからマロリーの『アーサー王の死』の夢を、他の同名の三作品と比較検討していくが、はじめにマロリーの作品中、本稿でとりあげるキャクストン版第1巻と、結末部分にあたる第21巻に影響を与えたと思われる典拠作品と、登場人物の相互関係について少し説明する。

はじめに典拠作品を時間軸に沿って述べる。13世紀に書かれたフランス流布本サイクル『アーサー王の死』(the French Vulgate Cycle *La Mort le Roi Artu*) (以下、便宜上『フランス版』と略す)、ついで14世紀半ばから

後半にかけて、ジェフリー・オブ・モンマス (Geoffrey of Monmouth) の年代記『ブリテン列王史』 (*The History of the Kings of Britain*) の影響を強く受けた作品であるイギリスの『頭韻詩 アーサー王の死』 (*the Alliterative Morte Arthure*)、(以下『頭韻詩』と略す)、同じく14世紀後半の、二種類のフランスの散文ロマンスを素材とした『八行連詩アーサー王の死』 (*the Stanzaic Morte Arthur*)、(以下『八行連詩』と呼ぶ) が、マロリーの主な典拠作品と言われるものである。マロリーの作品中アーサーの死が描かれる第21巻に最も影響を与えたといわれるのは、ここに挙げた『八行連詩』である。

また『アーサー王の死』では、アーサー以外にも多くの王や騎士たちが登場するが、特に本稿に関連している人物の関係図は以下のようなものである。



(三重横線は正式な結婚を示す)

ここでアーサーとモルドレットの関係に注目したい。本稿のもう一人の主要な登場人物、モルドレットは、アーサーと父違いの姉であるロット王妃モルゴースとの間にできた息子である。モルドレットがアーサーの甥であり、同時に息子であるという複雑な関係は、後にアーサーの運命に決定的な影響を及ぼすことになる。

Ⅱ 中世における夢

中世では、夢は現代とは違って解釈された。現代人にとっては異様と思われる夢、幻覚や幻視も、中世の人々にとっては日常茶飯事だったようである。

夢の内容や幻覚体験が、文学的創作ばかりでなく、年代記や伝記にも違和感なく書き込まれている。

例えば、中世の文学的創作においては予言的、予兆的性格を示す夢の記述がしばしば登場し、特に有名なものは武勲詩『ロランの歌』(*La Chanson de Roland*)に見られるシャルルマーニュ (Charlemagne) の夢である。彼は予言を伝える夢を4回見るが、そのいずれもが重大な警告を意味している。その一例として、ロランの義父ガヌロンの裏切りによってロラン率いる王軍が全滅することが、夢によって伝えられるという場面が挙げられる。⁴ また12世紀前半に書かれたとされるジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』では、アーサーが始めて王として登場するが、そこにはアーサーの夢の記述がある。王はこれから起こる戦いの前兆となる不吉な夢を見るのである。⁵

幻覚体験は8世紀の『聖グズラーク伝』(*Felix's Life of Saint Guthlac*)に詳細に記述されている。初期イギリスの聖者の一人である聖グズラーク (St. Guthlac) (673?-714)は無敵の戦士として活躍したが、24歳のときに突如修道院に入り、その後イギリス中部のクロウランドの沼地に庵をかまえ、隠者として生涯を送る。幻覚現象はこの庵で経験されたことで、彼の死後、フェリクス (Felix) という修道士によってラテン語で書かれた。その中では聖グズラークが悪魔の誘惑や野獣に襲われるという試練にさらされた折りに、主の祈りを捧げることによって、その悪魔や野獣が「煙のように消え失せた」という記述が多々見られる。この伝記は歴史的事実に基づくものではなく、聖者伝として初期キリスト教会以来の伝統にのっとり、修道士フェリクスがその当時の様々な幻覚的現象を材源に作成したものであることが判明している。確かに歴史的事実ではないにしても、豊富な幻覚体験の記述は、キリスト教の聖者の高德を信者に伝えるという点で、きわめて有効な手段であった。

また中世における幻視文学は、それまでの黙示録的文献とはスタイルも明

確に異なっていた。現代において 60 以上の作品が、何百もの写本の形で存在していることから分かるように、まさしく幻視文学は「大量消費市場向けのジャンルに発展」（ターナー 136）していた。これら幻視文学は、主に聖職者の筆になるもので、醜悪な地獄の詳細な描写が特徴であり、地獄の絶えざる恐怖を示すことで、聴衆や読者に罪を犯すことのないようにと訓戒の役目を果たすものであった。この醜悪な地獄の描写は、後の章でアーサーの夢を分析する際にも関連してくる。

中世の夢の理論は、4 世紀にマクロビウスが『スキピオの夢についての注釈』の中で展開した夢の解説に基づいている。彼は夢を 5 つの範疇に分類した（Macrobius 88-90）。そのうち三種類は真実を予言するものと言われ、① *somnium*, ② *visio*, ③ *oraculum* と呼ばれ、未来を予言する力がある。謎めいた夢である *somnium* ではあいまいに、予言的な *visio* では明確にこれを告げる。託宣の夢である *oraculum* は、先祖や「それ以外の神聖な者あるいは威厳あるもの」（ルイス 101）が夢の中に介入し、眠るものに未来の出来事を明確に告知したり、助言を与えたりするものである。残り二種類は④ *insomnium*, ⑤ *visum* と呼ばれ、「予言を含まず、いかなる有用性も、意義もない」（ル・ゴフ『中世の身体』155）とされているものである。

このマクロビウスの夢の注釈は、「夢の啓示的意味を否定し、（夢が）肉体的心理的要因」に由来するとした中世の医学者たちによって、懐疑的にみなされはしたものの、総じて中世に存在した「夢の理論をほぼ包括的に体系化している」と評価されている（松井 155）。また「夢見手にはヒエラルヒーがあり、また至高の権威を身に帯びた人物の夢だけが反駁の余地のない正当性をもつ前兆夢とみなされうる、との古代思想の伝統的イデーを発展させている」という指摘もなされている（ル・ゴフ『中世の夢』79）。王の夢を分析するのにふさわしいこの理論を、アーサー王の夢に適用していく前に、次項で具体的に王の見た夢を挙げる。

Ⅲ アーサー王の夢：マロリー『アーサー王の死』の場合

マロリーの作品では、アーサー王は自らの運命の転換期に全部で4回夢を見る。本稿で関連があるのは一回目、三回目と四回目の夢である。一回目は怪獣グリフィンや蛇が、アーサーの国に押し寄せ、国を焼き払い、人々を皆殺しにするが、アーサーは苦勞の末にこれらの怪獣を退治する夢である。

Than the kynge dremed a mervaylous dreame whereof he was sore adrad. (But all thys tyme kynge Arthure knew nat [that] kynge Lottis wyff was his sister.) But thus was the dreame of Arthure: hym thought there was com into hys londe gryffens and *serpents*, and hym thought they brente and slowghe all the people in the londe; and than he thought he fought with them and they dud hym grete harme and wounded hym full sore, but at the last he slew hem.

(Works 41 ; イタリアック筆者)

三回目は、キリスト教の三位一体の主日 (Trinity Sunday) に、彼が不義の息子モルドレッドとの戦いの前に見る夢で、「運命の車輪」(“a whele”)が登場し、アーサーの運命の劇的な変化が、車輪の頂上からの転落という形で描写される。アーサーは真っ黒な沼に落ち、気味の悪い蛇などにからまれる夢である。

So uppon Trynnyte Sunday at nyght kynge Arthure dremed a wondirfull dreame, and in hys dreame hym semed that he saw uppon a chaflet a chayre, and the chayre was faste to a whele, and thereuppon sate kynge Arthure in the rychest clothe of golde that myght be made. And the kynge thought there was undir hym, farre from hym, an hydeous depe blak watir, and therein was all maner of *serpentis* and wormes and wylde bestis fowle and orryble. And suddeynly the

kyng thought that the whyle turned up-so-downe, and he felle amonge the *serpents*, and every beste toke hym by a lymme.

(Works 1233 ; イタリアック筆者)

この夢のすぐ後のまどろみの中に (“nat slepynge nor thorowly wakyng”) 亡くなったガウェインが登場し、モルドレッドとの戦いを何とか回避するようにとアーサー王に忠告する。四回目の夢は幻視とも言える。⁶

And than so he awaked untylle hit was nyghe day, and than he felle on slumberyng agayne, nat slepyng nor thorowly wakyng.

So the kyng semed verrily that there cam sir Gawayne unto hym with a numbir offayre ladyes with hym. . . . ‘Sir’ seyde Sir Gawayne, ‘. . . Thus much hath gyvyn me leve God for to warn you of youre dethe: for and ye fyght as to-morne with sir Mordred, as ye bothe have assygned, doute ye nat ye shall be slayne, and the moste party of your people on both parties. (Works 1233-34)

上述したマクロビウスの夢の分類によれば、この一回目と三回目の夢は①の *somnium* に該当し、ガウェインの登場する四回目の夢（幻視）は、③の *oraculum* に相当するものである。一回目の夢は、謎めいた夢で、その内容が判然としない。アーサーはその夢を気かけながらも、気晴らしに狩りに出かける。その後、この夢は魔術師マーリン（Merlin）によって夢解きがなされる。また三回目の夢の後、王は驚愕して助けを呼びながら目覚める。この夢の内容は四回目の夢（幻視）と繋がっており、王は味方の領主や賢明な司教たちに亡くなったガウェインの警告を伝える。

Ⅳ 「運命の車輪」からの転落：他の同名の作品との比較

今回、主な比較の対象になるのは、この中の三回目の夢である。各作品の対象となる夢の中で、王が運命の車輪から転落する部分は次に挙げる。

『フランス版』では、アーサー王の夢の中に「運命の女神」と「運命の車輪」が登場し、「運命の女神」が、アーサー王の高慢が原因で、繁栄の頂上から没落していくと明確に告げる。王は「運命の女神」に捉えられ、情け容赦なく地上に突き落とされたために、その衝撃で身体が酷く損傷した感覚を味わう。

‘But such is earthly pride that no one is seated so high that he can avoid having to fall from power in the world.’ Then she took him and pushed him to the ground so roughly that King Arthur felt that he had broken all his bones in the fall and had lost the use of his body and his limbs. (The Death of King Arthur 205)

この『フランス版』を一部典拠としている次の『頭韻詩』においても、アーサー王の没落の原因は、彼の高慢に由来する。「運命の女神」は正午になると、それまで王に見せていた愛顧を一変させ、無慈悲に車輪を回転させ、王を下方へと転落させる。“Abowte scho whirles the whele and whirles me vndire, / Till all my quarters pat whille whare qwaste al to peces, / And with that chayere my chyne was chopped in sondire!” (*Morte Arthure* 3388-90)。転落後の王の身体は、「四肢は微塵に碎け、脊椎は寸断される」と描写される。王は寒さに震えながら、夢に疲れ果てて目覚める。

次に引用する『八行連詩』のこの夢の部分は、『フランス版』を素材としたとされているが、夢の内容にはかなりの相違が見られる。アーサー王はソールズベリーの丘 (Salisbury Plain) で、叛乱を企てたモルドレッドとの戦いを明日に控えている。その戦いの前夜の夢が比較の対象である。ここで

は、王は正午になると突然に、「運命の車輪」から転落させられる。「運命の女神」は登場せず、ただ「運命の車輪」の描写だけが見られる。

The wheel was ferly rich and round;
In world was never none half so high;
Thereon he sat richly crowned,
With may a basaunt, brooch, and bee;
He looked down upon the ground;
A black water there under him he see,
With *dragons* fele there lay unbound,
That no man durst them nighe nigh.

He was wonder ferde to fall
Among the fendes there that fought.
The wheel over-turned there with-all
And everich by a limm him caught.

(*Stanzaic Morte Arthur* 3176-87;イタリック筆者)

王が地面を見下ろすと、そこには漆黒の水（“A black water”）があり、無数の竜（“dragons fele”）が長々と横たわっていて、人間の気配が感じられない。彼がひどく転落を恐れているにもかかわらず、「運命の車輪」は非情にも回転し、王はのたうつ竜の間へと投げ込まれ、その悪魔（“the fendes”）のような竜が王の四肢に絡みつく。「運命の車輪」から転落した王は『フランス版』や『頭韻詩』の描写に見られるように大地に叩きつけられるのではなく、水中へと転落し、悪魔と形容される気味の悪い竜にまとりつかれる。

ではマロリーではこの場面はどのように描写されているのか。すでに前章

の引用から分かるとおり、この場合も『八行連詩』と同様に、ソールズベリーの丘における戦いの前夜の夢である。ここでも、転落後は地面に衝突するのではなく、恐ろしく深い黒い沼（“an hydeous depe blak watir”）に落ち、気味の悪い蛇や、竜、邪悪で恐ろしい動物など（“all maner of serpentis and wormes and wylde bestis fowle and orryble”）に絡まれるというものである。このようにマロリーにおけるアーサーの第三の夢の部分、特に「運命の車輪」から転落後の描写は『八行連詩』との共通部分が多く見られる。この二つの作品では、「運命の女神」に関する言及はなく、「運命の車輪」だけが登場する。権力の頂上にあって、絢爛豪華な衣装で繁栄を謳歌していたアーサーは、この「運命の車輪」の突然の回転によって、漆黒の沼へと転落させられる。ただマロリーの作品と、その直接の典拠といわれる『八行連詩』との違いは、落ちたアーサーにからみつくものは、マロリーの場合、竜だけではなく、蛇も登場することである。マロリーはこの部分で『八行連詩』とほとんど同じ描写をしながら、アーサーにまわりつく気味の悪い動物として、複数の蛇を最初に挙げている。このアーサーの夢に関する言説の中で、注目すべき言葉は「蛇」と「黒い沼」である。特に「蛇」は、この後でアーサーの命運を決める重要な役割を果たすことになる。

V 夢における「蛇」と「黒い沼」の表象

夢を見た後で、アーサーは高位の騎士二人と司教二人を使者に立て、モルドレッドとの間に休戦協定を結ぼうとする。ここで『八行連詩』とマロリーの作品における休戦協定の部分を比較検討する。休戦協定に関する引用を次に挙げる。いずれの作品においても、一匹の蝮が登場し、一人の騎士を刺傷してしまう。

But as they accorded sholde have been,
An adder glode forth upon the ground;

He stange a knight, that men might sen

That he was seke and full unsound.

(*Stanzaic Morte Arthur* 3340-43; イタリアック筆者)

不破氏も指摘しているように『八行連詩』では、「休戦協定が結ばれるはずであった時に」(“But as they accorded sholde have been”)と仮定法になっており、その仮定を裏切るような形で蝮が一人の騎士に噛み付く。この蝮(“adder”)は古英語の水蛇(nædre)で、14世紀頃に(a nadder)が、(an adder)に変化して現在に至ったものである。したがって、もともとは水蛇という意味の“adder”からは、アーサーの夢における「黒い沼」の「蛇」を想起させる。この蝮を払い除けようと騎士が抜いた刀が開戦の合図と誤解され、緊張の高まっていた双方の陣営はこれをきっかけに激しい戦闘へと突入することになる。

次にマロリーの作品の同様の箇所を引用する。“And so they mette as their poyntement was, and were agreed and accorded thorowly. And wyne was fette, and [they] dranke togydir. Ryght so cam oute an adder of a lytyll hethe-buysshe, and hit stange a knyght in the foote”(*Works* 1235; イタリアック筆者)。マロリーでは、この休戦協定の部分は仮定法ではなく、休戦協定は「同意して」(“agree”)と、「合意した」(“accord”)と言葉を重ね、さらに「完全に」(“thorowly”)という言葉まで加え、協定がいったん結ばれたことを強調している。その後、和平の成立を祝うため、「ワインが運ばれ、それを飲む」(“wyne was fette, and [they] dranke togydir”)ということまで付け加えられている。しかし、ここでも一匹の蝮(“an adder”)の登場により休戦協定は無に帰してしまうのである。言葉の細部に注目すると、マロリーの場合のほうが、事態が急変するに当たっての蛇の登場が強く印象づけられる。

「蛇」は古代諸文明において、さまざまな宗教的意義が与えられ、肯定的

にせよ、否定的にせよ、象徴として重要な意味や機能を与えられた動物である。聖書においては、創世記の記述のとおり、楽園にいる人間の墮落のきっかけを作った狡猾な動物であり、邪悪で有害なものであり、悪魔の化身とされた。⁷

また時には、蛇の邪悪で有害な特性を強調して、毒性のある蝮として扱うこともある。また旧約聖書のイザヤ書(14.29)には、バビロン人に対する警告として「蛇の根からまむしが出、その実は翼のある竜なのだ」という記述が見られる。このことから蛇と蝮を同一視して差し支えないと言える。

次に「黒い沼」について考察する。中世ヨーロッパの色を詳細に分析した徳井によれば、黒という色のイメージは、中世では、美しさと喜びの源である白の反対側に位置づけられており、醜さと悲しみの源であるとされる。水は白で表現され、「美しく清らかな水が白い」のに対し、黒は「汚く危険な川の水はいつも黒い」というように、醜く危険な色とみなされた(46)。また中世には、アンジュー公ルネによる物語『愛に囚われし心の書』に見られるように、黒が嫉妬や怒りなどの比喩に使われている例がある(徳井 47-48)。黒は絶望と不安と悲しみ、さらに醜く危険な様子の表象として文学的創作に好んで用いられた。

さらに、アーサーの夢に登場する「蛇」や「黒い沼」は、第Ⅱ章で述べた中世の多くの幻視文学の地獄の描写に欠かせない存在である。6世紀後半の教皇グレゴリウスの『対話篇』では、修道士、貴族、商人が地獄の様子をグレゴリウスに語るという形式で書かれている。そこでの地獄の描写に「けがらわしく、耐え難い臭気を放つ黒煙を出す川」や、「恐ろしい生き物が川から頭をもたげ、人間の足を掴んで川へ引きこもうとする」などの表現が見られる。また1149年にアイルランドの修道僧が書いた『ツンドルの幻視』では、地獄めぐりをするツンドルの前に、地獄の暗闇、火炎、腐臭や、蛇、地を這う不気味な蛆虫などが登場し、罪を犯す者への恐怖をかきたてる。アー

サーの「運命の車輪」から転落後の状況は、これらの幻視文学の地獄の描写に酷似している。このことからアーサーが地獄へ落とされ、彼の運命が悲劇的結末を迎えることが示唆されていると言えよう。

Ⅵ モルドレッドの存在：具象化されたアーサー王の罪

しかし、この夢はアーサーの悲劇的結末だけを表しているのだろうか。マロリーの夢に関して、時間軸を遡って一回目の夢を再度検証してみよう。

キャクストン版第1巻でアーサーが、それと知らずに父違いの姉であるロット王妃と同衾した後に見る夢である。英文の引用は、すでに第三章に挙げているので、邦訳をここに挙げる。

その頃アーサー王は怪しい夢を見た。そして甚だしく気にやんでいた。
(しかしその間ずっと、ロット王妃が自分の姉であることは知らなかった。)
夢というのはこうである—この国に怪獣グリフィンや蛇どもが押し寄せてきて、焼き払い、人民を皆ごろしにした。アーサー王はこれらの怪獣と戦ったが、怪獣らにさんざんやっつけられ、深手を負わされた。しかしついに怪獣を倒した。
(厨川 88-81)

ここでマロリーは、わざわざ「しかしその間ずっと、ロット王妃が自分の姉であることは知らなかった。」(“But all thys tyme kyng Arthure knew nat [that] kyng Lottis wyff was his sister.”) という一行を入れて、アーサーの行為が過失であったことを強調する。なぜならば、マロリーは、人間的な弱さを持ちながらも、“The moste Kyng and nobelyst Knyght of the Worlde” (Works 1229) であるアーサーを描きたかったのである。すでに第三章で述べたように、アーサーは、この不思議な夢をひどく気に病んでいるのだが、この夢は、その後出会った魔術師マーリンにより夢解きがなされる。その夢解きによれば、アーサーは異父姉と同衾することによりモルドレッド

という子をもうけるが、その行為は神の怒りを買ひ、後にその子は、アーサーとアーサーの王国の騎士を破滅させるというものであった。この夢の中で、運命の転換を担う蛇の存在を、再度指摘することが出来る。マーリンの解釈から、ここに存在している蛇は、モルドレッドを象徴していることが明らかになる。

この一回目の夢は『八行連詩』には書かれていない。ではマロリーは、どの作品から、夢の中の蛇がモルドレッドを示唆するというヒントを得たのだろうか。それは『フランス版』に書かれている。そこでは、アーサーはモルドレ誕生の夜に、一匹の蛇が自分の体内から出てくるのを見る。その夢の意味は、後にモルドレの叛乱を知らされたアーサー自身から説き明かされる。彼がアーサーの全領土を焼き尽くし、攻撃を仕掛けてくるのである。“Ah, Mordred, now you make me realize that you are the *serpent* I once saw issuing from my stomach, which burnt lands and attacked me” (*The Death of King Arthur* 192; イタリアック筆者)。『フランス版』では、アーサーと、異父姉であるロット王妃の同衾の結果生まれたモルドレを、アーサーの体内から出てくる蛇と同一視し、アーサーの近親相姦という行為の因果応報として、モルドレとの対立、それに続く戦い、そして双方の死を描いている。従ってマロリーの作品において、夢に登場する蛇は、『フランス版』からもモルドレッドを暗示していると言える。

さてかわって『八行連詩』において、アーサーの「運命の車輪」からの転落の夢はどのように解釈されるのか。ここでは蛇の代わりに竜 (dragon) が登場する。サウスウォード (Southward) は、ケルト語で竜は (mor-draig) と呼ばれることから、この竜がモルドレッドを示唆していると述べている (249-51)。つまりマロリーの材源である三作品において、モルドレッドは、夢に登場する蛇や竜と密接な関連性を持った存在であることが判明したと言える。

結び

マロリーは、蛇のモチーフに関しては『フランス版』を典拠にしたものの、フランス版に登場する「運命の女神」は省略した。そして引用からも分かる通り、「運命の車輪」から転落した時の状況にも変更を加えた。

予兆的、予言的性格をもつアーサーの三番目の夢は、明らかにアーサーの近親相姦の結果であるモルドレッドの存在が、アーサーを破滅に導くことを示唆している。マロリーは、アーサーが知らずにロット王妃と関係した一節を付け加えることで、アーサーの行為が罪ではなく、過失であったことを強調する。

さらに、アーサーが夢の中で亡くなったガウェインの忠告を受け入れ、モルドレッドとの戦いを回避するために、モルドレッドに最大限譲歩し、合意に達したことを、マロリーは詳細に書き込んでいる。

しかし、マーリンが予言したように、神は近親相姦の罪を犯したアーサーにそれに相応しい結果をもたらした。アーサーは、ソールズベリーの戦いで、甥であり、息子でもあるモルドレッドの手にかかり瀕死の状態になる。

マロリーの作品において、アーサー王の円卓騎士団が崩壊し、王国が滅亡していく過程には、さまざまな原因が絡み合っており、単一の原因だけではないのは確かである。没落の原因の一つを探る際に、夢の描写にしばって典拠作品を比較してみた場合、モルドレッドの存在は無視できないと思われる。新倉が「神の裁きは、かように過酷であり、地上最大のしかも最もキリスト教的な君主の罪と呼ぶより「過失」と見るべきものすらも容赦しなかった」(138)と述べるとおり、アーサーの行為は、アーサー自らの生命で贖われたのである。

注

*本稿は、同志社大学英文学会 2006 年度年次大会（10 月 29 日）における口頭発表の原稿に加筆修正を施したものである。

- 1 本稿における Sir Thomas Malory 作 *Le Morte D'Arthur* の引用はすべて *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Eugène Vinaver, rev. P. J. C. Field, 3rd ed., 3 vols. (Oxford: Clarendon, 1990) からであり、括弧内にページ番号を記す。
- 2 不破は『フランス版』では、王国の崩落の原因は王の近親相姦の代価として、いわば因果応報としてモードレッドの反乱を受けとめているのに対し、マロリーは明らかに異なる展開を選択しているとし、“unhappy” という表現が、マロリーによって頻繁に使用されていることを、豊富な用例を挙げて説明し、「不幸な偶然」(unhap)によって王国と円卓騎士団の崩壊が生じたことを見事に検証している。不破有理「偶然の悲劇」—トマス・マロリー『アーサー王の死』における unhappy とジョン・リドゲイト『言語文化』第22号、明治学院大学言語文化研究所 2005, 38-51.
- 3 「運命の女神」と「運命の車輪」に関する考察は、横山安由美「アーサー王物語群における『運命の輪』のメタファー」(『言語文化』第11号、明治学院大学言語文化研究所 1994, 18-31) に詳しい。
- 4 Charlemagne の夢は次のように描写されている。
 He dreamed he was at the main pass of Cize;
 In his hands he was holding his lance of ash.
 Count Ganelon seized it from his grasp;
 He broke it and brandished it with such violence
 That the splinters flew up into the sky. (*The Song of Roland* 719-23)
- 5 Arthur は熊と龍の戦いの夢を見る。
 Arthur fell into a very deep slumber. As he lay lulled in sleep he saw a bear flying through the air. At the growling of the bear every shore quaked. Arthur also saw a terrifying dragon flying in from the west and lighting up the countryside with the glare of its eyes. When these two met, they began a remarkable fight. The dragon which I have described attacked the bear time and time again, burning it with fiery breath and finally hurling its scorched body down the ground.
 (Geoffrey of Monmouth 237)
- 6 ル・ゴフは夢と幻視の相違について「キリスト教の教義では、下位の範疇に属する「夢」—ラテン語の *somnus* (眠り) を語源とする *somnium* という名で呼ばれる一と、覚醒状態で、あるいは睡眠中において、隠された真実を垣間見させる、崇高なる「幻視」との間に区別が設けられている。」としている。キリスト教と夢に関しては Jacques Le Goff, *The Medieval Imagination* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1988) のなかで詳細な解説がなされている。
- 7 聖書において、蛇はこのように否定的に描写されることが多いが、一方で「蛇の

ごとく賢くあれ」(マタイによる福音書 10:16) や、「青銅の蛇」(民数記 21:4-9) に見られるように、肯定的な比喩に使用されることもある。

参考文献

- The Alliterative Morte Arthure*. Ed. Valerie Krishna. New York: Burt Franklin & Co., 1976.
- Batt, Catherine. *Malory's Morte Darthur*. Basingstoke: Palgrave, 2002.
- The Death of King Arthur*. Trans. James Cable. London: Penguin Books, 1971.
- Felix's Life of Saint Guthlac*. Trans. Bertram Colgrave. Cambridge: Cambridge UP, 1985.
- Gardiner, Eileen. *The Vision of Tundale: A Critical Edition of the Middle English Text*. Ann Arbor: UMI, 1980.
- Geoffrey of Monmouth. *The History of the Kings of Britain*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1984.
- Höltgen, Karl Josef. "King Arthur and Fortuna." *King Arthur A Case Book*. Ed. Edward Donald Kennedy. New York and London: Routledge, 2002. 121-37.
- King Arthur's Death: The Middle English Stanzaic Morte Arthur and Alliterative Morte Arthure*. Ed. Larry Benson. Rev. Edward E. Foster. Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1994.
- Macrobius' Commentary on the Dream of Scipio*. Trans. William Harris Stahl. New York: Columbia UP, 1952.
- Malory: Texts and Sources*. Ed. P.J.C. Field. Cambridge: D.S. Brewer, 1998.
- Le Morte Darthur*. Ed. Stephen H.A. Shepherd. New York: W.W. Norton, 2004.
- Saint Gregory of the Great: Dialogues*. Trans. Odo Zimmerman. Washington: The Catholic University of American Press, 1977.
- The Song of Roland*. Trans. Glyn Burgess. New York: Penguin Books, 1990.
- Southward, Elaine C. "Arthur's Dream." *Speculum*, 18. 2 (1943): 249-51.
- The Works of Sir Thomas Malory*. Ed. Eugène Vinaver. Rev. P.J.C. Field. Oxford: Clarendon Press, 1990.
- アリス・K・ターナー『地獄の歴史』野崎嘉信訳 東京：法政大学出版局，1995.
- 厨川文夫・圭子編訳『アーサー王の死』中世文学集Ⅰ 東京：ちくま文庫，1997.
- C. S. ルイス『廃棄された宇宙像』山形和美監訳 東京：八坂書房，2003.
- J・ル＝ゴフ『中世の身体』池田健二・菅沼潤訳 東京：藤原書店，2006.
- J・ル＝ゴフ『中世の夢』池上俊一訳 名古屋：名古屋大学出版会，1999.
- 新倉俊一『ヨーロッパ中世人の世界』東京：ちくま学芸文庫，1998.

松井倫子「中世ヨーロッパの幻覚体験」保崎秀夫他編『精神病理学の新次元 1』

東京：金剛出版，1985，143-74.